
遊戯王 5 D's 龍騎士（ドラゴン・ナイト）使いの物語

青龍の剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's ドラゴン・ナイト
龍騎士使いの物語

【Nコード】

N3355P

【作者名】

青龍の剣

【あらすじ】

なぜか知らないうちに5D'sの世界にトリップしていた少年。少年が持つデッキはOCGにはないカードたちだった。

主人公が使うデッキはオリカが大半のデッキです。特にモンスターが多いので更新が遅れるかも知れません。

龍騎士(ドラゴン・ナイト)使い(前書き)

始めまして、青龍の剣です。

物語の始まりは遊星がちょうど13話でフォーチュンカップに招待されたところから始まります。ストリップした時の状況とかはまた後で書きます。

龍騎士（ドラゴン・ナイト）使い

ここはネオ童実野シティのサテライト、そこで一台のD・ホイール（デュエルが出来るバイク）が颯爽していた。そのD・ホイールは青く風のような白い塗装も施されたものだ。そのD・ホイールはしばらく走った後、途中まで作りかけられている橋の近くで止まった。すると、一人の青年がD・ホイールから降りて近くの建物に入ってしまった。

ここから一人視点で行きます。

俺の名前は黒月 龍月やけに苗字や名前に月が入っているのは気にしないほしい。今俺は知り合いのアジトに来ている。

「お〜い！ クロウ！ いるか？」

俺がそう叫ぶと奥から顔がマーカ―だらけの男が出てきた。彼の名前はクロウ・ボーガン。俺の一番親しい親友の一人だ。後、二人いるのだが、一人はシティの方において、もう一人は今どこにいるかは

分からない。まあ、その内会えるだろう。因みにマーカーというのは、セキュリティに捕まった犯罪者がつけられる罪人の証となるもの。

「おう！ 龍か、どうかしたか？」

「いや、なんでもない。それより子供達はいるのか？」

「ああ、いま外に出てるよ」

とクロウがそう言った時、

「クロウお兄ちゃん！ ただいま！」

「あ！ 龍お兄ちゃんだ！」

「本当だ！ 龍お兄ちゃんだ！」

と帰ってきた子供達が一斉に俺やクロウに駆け寄ってきた。この子供達はクロウが育てている親のいない子供達である。俺は何度もここに来ているので面識はある。

「よ、元気にしてるか？」

俺は子供達の中の一人の頭を撫でながら言った。

「うん！」「」

子供達は笑顔で俺の質問に答えた。

「よし、それじゃあこれはおみやげだぞ」

俺はポケットから遊戯王のカードをいくつか出して子供たちに渡した。このカードたちは全部、道やゴミの中から見つけたものだ。俺はこうやって見つけたカードをちゃんと使ってくれる子供達とかにあげているのだ。俺は子供達にカードを渡し終わった後、クロウとしばらく雑談をした。そして、日が落ちかけたころ、

「クロウ、それじゃあ帰るな」

「おう！　また来いよ。龍！」

「ああ」

俺はそう言ってクロウのアジトを出ると、自分のD・ホイール“ブルーホワイトウィング”に乗り込み、クロウのアジトを後にした。しばらく走っていると、目の前に古ぼけたマンションが見えてきた。ここが俺の住まい（アジト）だ。俺はそのままそのマンションの一

階に入り、D・ホイールから降りて、駐車スペースに置き、外に出て、外の階段から自分が寝ている部屋に行こうとしたとき、

「お待ちください」

「ん？」

突然、後ろから誰かに呼び止められた。俺は足の動きを止めて後ろを向くと、そこには、顔がピエロに見える小さい人がいた。

「（こいつは確か…イエーガーだっけ？）誰だ、あんた？」

「これは失礼しました。私、ゴドウィン長官の命で来ました。イエーガーと申します」

俺は名前を知っているが、一様聞くと、イエーガーはお辞儀をしなから答えた。

「なるほど。で、治安維持局局長の命で来たイエーガーさんが俺に何の用ですか？」

「はい。さっそく用件を言いたいのですが、・・・」

俺の質問にイエーガーは話している途中で言葉をやめて、腕にデュ

エルディスクを着け始めた。

「その前に、私とデュエルしていただきたい」

「それもゴドウィン長官の命令か？」

「さあ、どうでしょうか？」

俺はまた質問したが簡単にたぶらかした。俺は仕方ないと思いD・ホイールのところに行き、D・ホイールについているデュエルディスクをつけた。そして、イエーガーのところに戻り、

「こっちは準備いいぜ」

「分かりました。それでは・・・」

「「デュエル!!!」」

龍騎士(ドラゴン・ナイト)使い(後書き)

とりあえずここまでです。

デュエルは次の日の方に書きます。それでは、

龍騎士(ドラゴン・ナイト)の戦い(前書き)

イエーガーとのデュエルです。うまく行くかわかりませんがよろしくお願ひします。

龍騎士（ドラゴン・ナイト）の戦い

「デュエル!!」

俺とイエーガーはそう言うと、デッキをディスクに差した。するとデッキが自動的にシャッフルされ、止まったところをお互いカードを5枚引いた。そして、イエーガーの方のディスクが光って、先行を知らせた。

「私のターン、ドロー」

イエーガーはそう言うと、デッキからカードを一枚引いた。

「私は、『ジエスター・ロード』を攻撃表示で召喚します。」

ジエスター・ロード 4

効果モンスター

攻撃力/0 守備力/0

このモンスターは、自分のモンスターゾーンにこのモンスターしかない時、フィールド場に存在する魔法・罠カード一枚につき、1000ポイントアップする。

イエーガーはそう言って、カードをモンスターゾーンに置くと、フィールド場にピエロのようなモンスターが現れた。

「さらに、カードを二枚セットして、ターンエンド」

イエーガーはさらにカードを二枚、魔法・罠ゾーンに差すと、モンスターの後ろにカードが二枚伏せられた状態で出現した。そして、そのままターンを終了させた。

「俺のターン、ドロー」

俺はデッキからカードを引くと、手札を確認した。そして、

「俺は、『ドラゴン・ナイト龍騎士 デイフェンダー』を守備表示で召喚」

俺はそういって、カードを置くと青い鎧を着て、巨大な盾を持った人が現れた。その後、盾で自分を守るように屈んだ状態になった。

ドラゴン・ナイト龍騎士 デイフェンダー 3

効果モンスター

攻撃力/1000 守備力/2000

このモンスターはターンに一度、戦闘による破壊を無効にする。

さらに、守備表示の時には、魔法・畏・モンスター効果による破壊も一度だけ無効にする。

「さらに、カードを二枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー、私はこのままバトルフェイズに移行します。『ジエスター・ロード』で『龍騎士 デイフェンダー』を攻撃します。モンスターの効果により、このモンスターの攻撃力は魔法・畏カード一枚につき、1000ポイントアップします。現在、フィールド場に魔法・畏カードは四枚、つまり攻撃力は4000ポイントアップします。」

ジエスター・ロード

攻撃力

0 4000

「行きなさい！ 『ジエスターロード』！」

イエーガーがそう言うと、『ジエスター・ロード』は火の玉をジャグリングしながら少し近づいた後、『デイフェンダー』に向かって、火の玉を投げた。火の玉は『デイフェンダー』に当たり爆発した。しかし、『デイフェンダー』はそのままの体制でいた。

「ぜんねんだが、『デイフェンダー』は一ターンに一度、戦闘では

破壊されない」

「なるほど、私は『ジェスター・コーフィン』を攻撃表示で召喚し、ターン……」

「ちよつと待った！ 『ジェスター・コーフィン』が召喚された時に、^{トラップ}罠を発動！」

俺がそう言つと、俺のフィールド場に伏せられていたカードの一枚がめくられた。

「『激流葬』！ このカードの効果により、フィールド場に存在するすべてのモンスターを破壊する！」

俺がそう言つと、大きな波が起こり、イエーガーのところにいる二体のモンスターが流された。しかし、俺の『ディフェンダー』は流されずそのまま留まった。

「な！ なぜ、あなたのモンスターは破壊されないですか！」

イエーガーはそのことに驚き、俺に聞いてきた。

「『ディフェンダー』のもう一つの効果、このモンスターが守備表示の時、一ターンに一度、魔法・罠・モンスター効果による破壊を

無効にする」

「なんですと！」

「俺のターンだ！ ドロー、（ここは念を入れて）それと同時に罠^{トラップ}を発動！ 『トラップ・スタン』！ この効果により、このカード以外の罠は発動出来ない！ さらに！ フィールド魔法^{マジック}を発動！

『龍騎士の里』！」

トラップ・スタン

罠カード

発動したターンのエンドフェイズまで、このカード以外の罠カードを発動することは出来ない。

俺がそう言つと、風景がサテライトの町並みからアフリカにある民族種族がいる町みたいになった。

龍騎士の里

フィールド魔法カード

このカードはフィールド場にある「龍騎士」と名の付いたモンスターカードの枚数により効果が変わる。

0枚の時、墓地からレベル3以下の「龍騎士」と名の付いたモンスター一体を特殊召喚することが出来る。

1枚以上のいる時、レベル4以下の「龍騎士」と名の付いたモンス

ター一体をデッキから手札に加えることができる。

2枚以上のいる時、「龍騎士」と名の付いたモンスターは戦闘では破壊されない。

3枚以上のいる時、「龍騎士」と名の付いたモンスターは魔法・罠の効果を受けない。

「俺は龍騎士の里の効果を発動する。フィールド場に「龍騎士」と名の付いたモンスターが一体以上のいる時、レベル4以下の「龍騎士」と名の付いたモンスター一体をデッキから手札に加えることができる。俺は、『龍騎士^{ドラゴン・ナイト} レディ』を召喚。さらに、『命削りの宝札』を発動！」

俺が召喚したのは、『ディフェンダー』と同じ青い鎧を来た女性だった。

命削りの宝札

魔法カード

デッキからカードを5枚ドローする。しかし、5ターン後に手札を全部捨てなければならない。

^{ドラゴン・ナイト}
龍騎士

レディ

3

効果モンスター

攻撃力/1300

守備力/1300

このカードは「龍騎士」と名の付いたモンスター一体に付き、「龍騎士」と名の付いたモンスターの攻撃力を200ポイントアップさせる。

「効果により、5枚をドロウ。さらに、『デュアルサモン二重召喚』を発動。その効果により、『ドラゴン・ナイト龍騎士 セイバー』を召喚」

今度は『レディ』に似ているが、『レディ』の髪が茶色に対して金色であるところと、露出度が少し高いところだ。

ドラゴン・ナイト
龍騎士

セイバー

4

効果モンスター

攻撃力/1800

守備力/1400

このモンスターが相手モンスター攻撃するとき、攻撃力を500ポイントアップする。このモンスターが直接攻撃した後、このモンスターはエンドフェイズにデッキに戻る。

デュアルサモン

二重召喚

魔法カード

このカードを発動したターン、もう一度だけ通常召喚できる。

「そして、『レディ』の効果は、フィールド場に存在する「龍騎士」と名の付いたモンスター一体に付き、「龍騎士」と名の付いたモン

スターの攻撃力を200ポイントアップさせる。仲間の絆！」

『ディフェンダー』

攻撃力

1000 1600

『レディ』

攻撃力

1300 1900

『セイバー』

攻撃力

1800 2400

「バトル！ 『レディ』と『セイバー』でダイレクトアタック！

竜骨剣 集！

ストライク・エア
風王鉄槌！」

俺がそう言つと、罨を封じられたイエーガーでは何も出来ず、レディが持っていた剣で、セイバーが剣から発せられた竜巻で攻撃した。

「アヒヤ〜！」

イエーガー

LP4000 0

「俺の、勝ちだ！」

俺は高らかに言った。

龍騎士(ドラゴン・ナイト)の戦い(後書き)

こんな感じです。感想や何かあったらお願いします。

運命への招待状

「なるほど、なるほど」

デュエルが終わった後、イエーガーは何かを納得したかのように左手を顎につけて顔を盾に振った。

「何を納得してるんだ？」

俺はイエーガーの行動に少しムカついた。

「あ、これは失礼」

イエーガーは俺から放たれた怒気に気づき急いで謝った。しかし、その顔には余裕とも取れる表情だった。

「それで、いきなりデュエルを振っというて何のようだ？」

「そうでした。……これを」

俺は怒りを抑えながら気になっていたことを聞いた。すると、イエーガーは思い出したように自分のポケットから一通の手紙を取り出

して俺に渡してきた。

「これは？」

「それは今度、ネオ童実野シティで行われる。フォーチュンカップの招待状でございます」

「何？ サテライト出身であるこの俺に？」

俺が受け取った手紙はサテライトの隣にあるネオ童実野シティで行われる大会の招待状だとイエーガーは言ってきた。俺が驚いているとイエーガーは続けた。

「さようでございます。もちろん簡単にサテライトのゴミであるあなたに渡すわけには参りません。そこで、先ほどのデュエルでございます」

「なるほど。さっきのデュエルで俺が負けた場合はこれを渡さず、そのまま帰るつもりだったのか」

「ちよつでいいます」

サテライトのゴミに関してはさらにむかついたが、少し落ち着いて考えた後、

「俺は辞退する。俺みたい奴が出たって意味無いし」

実際はあんまり原作には関わりたくないからなのだが、と俺がそう思っただけで言うとイエーガーは、

「それは出来ません。それにあなたが断るとあなたの仲間が大変なことになるですよ」

「何？」

俺が疑問を抱いていると、イエーガーはポケットから一枚の写真を取り出した。そこに写っていたのは、

「遊星！」

そこに写っていたのは俺の親友の一人である不動 遊星だった。

「今、彼はセキュリティの監視の下、シティにいます。もし、あなたが出場を辞退すればどうなることやら、いつひっひっひっ！」

「てめえ！」

俺はついに怒りが爆発してイエーガーに掴みかかった。しかし、イエーガーはすばやく後ろに引いてかわされた。

「これは危ない危ない。それでは当日にお迎えに参ります」

イエーガーはそう言つと逃げるように帰って行った。

「つつ！ あの野郎！」

俺は自分の怒りを拳を地面に叩きつけることで発散しながらイエーガーが帰って行った方向を見た。

フォーチュンカップまでの準備 前編

「くそ！ イーガーの野郎。今度会ったら一発だけでも殴ってやる！」

イーガーが帰った後、俺はアジトの俺が寝ている場所でベットの
上で寝転んでいた。

「たしかに主の言い分も分かる気がします。私もあの者は好きませ
ん」

突然、寝転んでいる俺の横にイーガーとデュエルしていたとき出
したセイバーがいた。

24

「やっぱりか、精霊あるお前でもやっぱりイーガーは好かないか」

「はい。特に人質を取るところで腹が立ちました」

「やっぱり騎士道に反するからか？」

「そうですね。やはり一デュエルリスト（騎士）は正々堂々として
いたほうがいいと思います。」

セイバーは俺のデッキの中にいるデュエルモンスターの精霊の一人だ。他にも精霊がいるのだが、セイバーは特に騎士道を重んじていて、俺のデッキの精霊の中では一番真面目な性格だ。

『それより、大会に出るのですか？ そのフォーチュンカップとやらに』

「ああ、仲間が危険にさらされているのに出ないっていう選択は出来ない」

『分かりました。主の決めたことです。私も全力で援護します』

「ありがとな。セイバー」

「………いえ」

俺がセイバーにお礼をいうと、セイバーは顔を赤くしながらもじもじしました。

『おいおい、赤くなっちゃまってるぜ。セイバー』

すると、セイバーの横から赤い槍を持ちセイバーより簡易の鎧を着けた男がテーブルに座っていた。

『な！ なにを言うんだ！ ランサー！』

「よ！ 元気にしてるか？ ランサー」

そうテーブルに座っているのは、セイバーと同じデュエルモンスターの精霊で、『ドラゴン・ナイト龍騎士 ランサー』だ。

『おう！ 元気にしてるぜ！ 龍！』

ランサーは俺のデッキの精霊の中で一番陽気で軽い口調で俺に話してくる。しかし、戦闘になると、軽い口調は変わらないが相手を一撃しとめるほどの強烈な槍さばきを見せる。

「そうか、他の奴らはどうだ？」

『ああ、ライダーとキャスターは相変わらず犬猿の仲だぜ。アーチャーとアサシンも変わらないし、バーサーカーも相変わらず無口だな。まあ、一番変わらないのはあの野郎だな』

「また、あいつが何かしたのか？」

『ああ、また別の精霊に喧嘩を吹っ掛けやがってな』

『またですよ。主もこちらに来て、何か言っただけでやっってください』

とさっきまで顔を赤くしてもじもじしていたセイバーは、あの男の

話になるといきなり話に入ってきた。

「いやムリだろう。唯一あいつだけ俺の話を聞かないし、あいつだけ俺のデッキに入るのを拒んだんだ。まあ、時が来たら何とかするさ」

『そんな行き当たりばったりなことをしてると……！
主！ 誰か来たようです！』

「分かった。ランサー。見てきてくれないか？」

『おう！ 分かったぜ！』

ランサーはそう言うと、ドアをすり抜けて外に出て行った。

『よろしいのですか。ランサーで？』

「いいんだよ。今、出て来ているのはセイバーとランサーしかいないだろう。それだったら、身軽なランサーの方がいいだろ」

『まあ、そうですね』

しばらくして、ランサーがドアをすり抜けて入ってきた。

「どうだった？」

『ああ、こつちに来ている男が一人いたぜ。まるで、お前を探しているみたいだったな。特徴は髭面で緑の服を着てたぜ』

「わかった。しばらくそいつを監視してくれないか？」

『じゃあねえな。わかった。』

ランサーはいやいや承諾した後、また外に出て行った。

「さて、俺はD・ホイールの調整に行くから。セイバーは戻ってくれ」

『分かりました。主、何かありましたらお呼びください』

セイバーはそう言うと消えてなくなった。俺はセイバーが帰ったことを確認した後、駐車スペースに行きD・ホイールの調節に入った。しばらく、D・ホイールの調整に入っていると、

『おい、龍、さっき言った男がこつちにやってきたぜ。確認してくれ』

ランサーが入ってきて、俺にそう伝えてきた。

「わかった。ランサーは戻っといてくれ」

『分かったぜ。うんじゃあな』

ランサーはセイバーと同じように消えていった。その後、俺は駐車スペースから外を見ると、一人の男がこっちに向かって歩いてくるのが見えた。

「（あの男は、雑賀か！）ま、まだD・ホイールの調節があったんだった」

俺は男が遊星のサポート役だった雑賀だとわかったが、まだD・ホイールの調節が終わっていないからD・ホイールのところに戻り、調整を再開した。しばらくして、

「ちよつとすまない」

と声をかけられて、後ろを見ると雑賀が駐車スペースに入ってきて俺に話しかけてきた。

「俺は雑賀って者だが、遊星の紹介で来たんだ。この近くに龍月って名前の奴がいるはずだが、どこにいるか知らないか」

俺は雑賀の言葉を聞いた後D・ホイールの調整を一時やめて、雑賀の方を振り向き、

「龍月は俺だ」

フォーチュンカップまでの準備 前編（後書き）

セイバーとランサーの元ネタは `f a t e` です。

フォーチュンカップまでの準備 中編

今、俺と雑賀は俺の住まいの俺が寝ている部屋とは違う部屋にいる。この部屋は、主にお客とかの相手をする部屋だ。まあ、マンションだし壊れていない部屋がたくさんあるからな。

「それで、雑賀さんは何しに俺のところに来たんですか？」

俺は雑賀が俺のところに来た理由は大体は想像が付くが、一様聞いてみた。

「さっきも言ったが、俺は遊星の紹介でお前に会いに来た。お前なら遊星の名前を言えば力になってくれると言ってたな」

「それで俺の力が必要なことって何ですか？」

「実はな、遊星の仲間を探しているんだが知らないか？」

雑賀はそう言いながらポケットから写真を取り出した。そこには、遊星の仲間のラリー、タカ、ナーヴ、ブリッツが写っていた。

「・・・・・・・・」

俺はしばらく黙った後、

「……………悪い。どこにいるかは分からない」

「そうか」

雑賀はそう言いながら写真をポケットに戻した。

「ところでお前は遊星とどういう関係なんだ？」

雑賀は写真をポケットに戻した後、俺にそう聞いてきた。

「……………仲間だ。昔のな」

俺は少し黙った後にそう答えた。雑賀は少し俺を見つめた後、

「そうか」

「今日はもう遅い。この部屋で寝るなら寝てくれてかまわない。俺はもう寝る」

俺はそう言って、雑賀の居る部屋を出て、上にある自分の部屋に向

かった。

「……なんでお前がここにいる。キャスター」

俺が自分の部屋に入るとベットに俺のデスクの精霊の一人、ドラゴン「ナイトキャスター」である。

「いえ、ただ来てみたくて来ました」

「本当は俺が寝ている所を襲おうとしてたんじゃないのか？」

「い、いえ、そんなことは！」

俺は呆れながら椅子に腰かけた。そして真剣な表情で、

「キャスター」

「なんででしょうか？ 御主人さま」

因みに御主人様と呼ぶのもキャスターだけである。

「いますぐ帰ってライダーとセイバーに伝えてくれ。明日、二人とデュエルするから準備しておいてくれ」ともちろんお前も準備し

ておけよ」

俺がそう言つとキャスターは少し戸惑つた後、

「分かりました。伝えておきます」

キャスターはそう言つと消えて行つた。俺はキャスターのいたベツトの上に転がり、そのまま寝た。

フォーチュンカップまでの準備 中編（後書き）

こんな感じですよ。少し強引でしたが、そこは温かい目で見てください。

フォーチュンカップまでの準備 後編（前書き）

実は前の話の流れ通りに精霊たちとデュエルと行きたかったんですけど、それを飛ばして番外編の方で出します。理由はいえません。

それではどうぞ！

フォーチュンカップまでの準備 後編

「……よいよいか」

俺は自分のアジトのマンションの屋上でシティを方を見ていた。今日はフォーチュンカップ当日、俺はイエーガーが言っていた迎えを待っていた。昨日を行われたセイバー、ライダー、キャスターの三人のとデュエルは俺の三連勝で終わった。

「（いよいよ、フォーチュンカップの当日か、イレギュラーの俺が入ったことで原作にどう影響するか分からないが、とりあえずは原作どおりに進んでくれることを願いたいな）……は〜」

「どうしたんですか？ マスター」

俺がいろいろと考え込んでいると後ろから声が聞こえた。後ろを向くと少し露出度の高い青い服を着て、目には緑の目隠しをつけた女性が腕を組んで立っていた。彼女の名前は『ドラキュン・ナイト龍騎士 ライダー』、俺のデッキの精霊の一人である。

「いや、なんでもない」

俺は笑顔でライダーの顔を見た後、再びシティの方を向いた。向き直る寸前にライダーの顔が赤くなっただのが見えた。

(何を赤くなっていたんだ?)

俺はそれに疑問を覚えたが、遠くから何かの音が聞こえたのでそこらの方を見ると、シティの方から小さな何かがこっちに向かってくるのが見えた。しばらくしてそれが何なのか分かった。ヘリだ。セキュリティのヘリだった。しかもそのヘリはこちらに向かってきているのが分かった。

「お迎えが来たようだな、ライダーはデッキに戻ってくれ」

「分かりました」

俺はそう言った後、ライダーは消えて、俺は階段に向かって歩きだした。そして、

「さうて、これからどうなるのかな？」

俺は少し微笑みながら階段を下りて行った

フォーチュンカップまでの準備 後編（後書き）

今回はこんな感じですよ。

短いですがね。

次回はいよいよ遊星達が登場します。

楽しみに！

フォーチュンカップ開幕&原作介入(前書き)

更新が遅れてすみません。

いよいよ原作介入です。

どうぞ！

フォーチュンカップ開幕&原作介入

遊星 said

今、俺と龍可に変装した龍亜と一緒にフォーチュンカップの開会式のため、ステージの上に立っている。いろいろとあつたが開会式は順調に進んでいる。たった一つの事を覗いて、

「さあ〜！これより、トーナメント表を発表するぞ！」

とMCがそう言った時、参加者の一人であるボマーが前に進み出て、

「その前に聞きたい事がある。ここにいる参加者は7名、本来参加する者は8名、一人足りないのではないか？」

大きな声で俺が思っていたこと言った。確かにステージに立っているのは、俺と龍亜を合わせて7人、1人足りないのだ。

「その心配はありません」

ボマーの疑問に答えたのは、この大会の主催者でさらに俺をこの大会に無理やり参加させた治安維持局長官のゴドウィンだった。奴はそのまま話を続けた。

「最後の参加者は、今ここに向かってる最中です」

そう言った後、突然、何かの音がした。会場の客や参加者がその方向を見た。

「遊星！ あれ見て！」

龍亜の言葉を聞き、俺も龍亜が差している方を見るとサテライトの方からヘリが一機、こっちに向かってくるのが分かった。しばらくして、そのヘリはスタジアムのヘリポートに降り立った。

「あのヘリにいるのが最後の参加者です」

ゴドウィンはヘリを見ながら言った。すると、

「誰だろうね。遊星」

「わからない。だが、どんな相手だろうと俺は負けない」

と隣にいた龍亜が質問してきたので俺はそう答えた。すると、ヘリの扉が開き、一人の男がD・ホイールを押し出てきた。

「あれは……！！」

「どうしたの？ 遊星」

俺の声に龍亜は不思議そうな顔をして覗きこんできた。しかし、俺は驚きを隠せなかった。一瞬、ジャックの方に目を見ると、ジャックもヘリから降りてきた男を見ながら驚いた顔をしていた。それもそのはずだ。その男は俺やジャックの親友、黒月 龍月だった。

遊星 said end

俺が会場に降り立った後、開会式が終わりトーナメントが発表された。俺は第四試合で対戦相手はフランクとなった。

（俺の相手はあのムカつくカウンセラーか……）

俺は対戦相手を見て、少しムカつきを覚えた。なぜなら、原作で龍可を苦しめたり、あのカウンセラーの性格とかが気にいらなかったからだ。そして、トーナメント発表からしばらく経ち、一回戦のボマー対龍可（龍亜）戦は、俺はD・ホイールの調整で見れなかった。けど、原作を知っているし、結果も文字通り、ボマーの勝利だった。そして今、俺の目の前には、

「久しぶりだな。遊星」

俺の親友である不動 遊星がソファーに座っている。ちょうどD・ホイルの調整を終えた俺は、第二試合の様子を見ようと、選手控室に入った。そして、液晶画面の近くのソファーに腰をかけたすると、その後、遊星が入ってきて俺の向かいのソファーに座った。

「ああ、二年ぶりだな」

俺と遊星は久しぶりに軽い挨拶した後、沈黙が起こったがしばらくして、

「・・・龍・・・なぜお前はこの大会に出ているんだ？」

「・・・それはな、・・・」

遊星の質問に俺はこの大会に出る事になった一部始終を伝えた。

「そうか。すまなかったな」

「遊星が謝る事はないぜ」

「しかし・・・」

俺と遊星がその後、しばらくお互いに何があったかを教えあっていること、

『ブラックローズドラゴン!!』

と液晶画面から声が聞こえたときだった。

「く!」

「う!」

突然、右腕が痛み出した。遊星の方を見ると遊星も右腕の掴み苦しんでいた。まあ、この辺は原作を見ているから知っているのだが、とそう考えていると腕の痛みが急に引いた。

「え?」

俺はそのことにびっくりしたが、急いで画面を見ると、まだブラックローズドラゴンは出ていた。そして、遊星の方を見るとまだ腕を押さえていた。

「ゆ、遊星！ 大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ」

俺は心配して話しかけたが、遊星は痛みをこらえながらそう言った。その後、遊星は液晶画面を見て、

「ブラックローズドラゴン」

と呟いた時、

「破滅を呼ぶ不吉なドラゴン。見覚えがあるようだな」

遊星の隣に龍可に変装した龍亜を倒したボマーは遊星にそう呼び掛けた。そして、ボマーは俺の横に座って来た。

「お前は確か……」

「ボマーだ。よろしく頼む」

「ああ、俺は黒月 龍月だ。こちらこそよろしく」

俺がボマーに話しかけようとしたらボマーの方から自己紹介をして

くれた。俺は少しあわてながらも自己紹介をした。そして、ボマーと少し話している後、遊星とボマーの二人が原作通りの話を始めた。そして、

『ブラック・ローズ・フレア!!』

これまた、原作通りに十六夜 アキが騎士のデュエリストを倒したのが液晶画面から目に入って来た。次は遊星の番か。

「勝てよ。遊星」

俺がソファから立って部屋を出て行くつもりになっていた遊星にそう言うのと、遊星は手をドアノブにかけるのをやめて振りかえり、

「・・・ああ」

と少し笑顔な顔でそう言った後、部屋を出て行った。

フォーチュンカップ開幕&原作介入（後書き）

こんな感じですよ。更新が遅れて申し訳ありませんでした。後、なんか書き方が変わってる？と思った人もいるかもしれませんが、時間を見つけては書いていたので、いろいろとごっちゃになってしまいました。

すみません。

さて、次回はいよいよ、龍月がムカつくカウンセラーとデュエルします。

それでは、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3355p/>

遊戯王5D's 龍騎士（ドラゴン・ナイト）使いの物語

2011年10月8日04時19分発行